

”Benito Cereno”：その語りの向こうにあるもの

秋好, 礼子
九州大学大学院文学研究科：博士課程

<https://doi.org/10.15017/6788253>

出版情報：九大英文学. 39, pp.121-138, 1996. The Society of English Literature and Linguistics,
Kyushu University
バージョン：
権利関係：



“Benito Cereno” ——その語りの向こうにあるもの

秋 好 礼 子

序

Melville の中編 “Benito Cereno” は、1855年に発表された。奴隷の反乱を扱ったこの作品は、南北戦争前夜ともいうべき時期に発表されたにもかかわらず、然程注目されなかった。執筆を生業とする者は、社会への影響力が大であることを多かれ少なかれ認識しているものだが、奴隷制擁護論者と反奴隷制論者が激しく議論していた時代において、作家 Melville は、自らの作品において何を言わんとしたのか。結論を先に言うと、奴隷問題を含めた、既存の社会通念におけるリアリティの欠如を暴き出し、当然のこととして語られ、社会において正当と見なされてきたことを転覆するという試みを、作家は作品中でやっているのだ。それは、*Moby-Dick* で、ダンボール紙の仮面の向こうを見ようとした Ahab さながら、社会における現象の向こうにあるもの、即ちイデオロギー、またそれによって虐げられた者たちの強い意志を明らかにしようとするものである。

同時代を生きた Hawthorne は友人 Franklin Pierce の応援をして、奴隷制を認める発言をしていた。彼は反奴隷制論者の言動を “antislavery agitation” とみなし、そのような運動は “the ruin of two races which now dwelt together in greater peace and affection, it is not too much to say, than had ever elsewhere existed between taskmaster and the serf” を引き起こすと考える。¹ さらに、奴隷制は放っておけば、 “some means impossible to be anticipated, but of the simplest and easiest operation” によって、いつか夢のように消えてなくなるだろうと言う。² しかし、Melville はそうは考えなか

った。彼は奴隷制を擁護しなかったが、かといって、奴隷制反対を声を大にして実際に唱えることもなかった。だが、Melville は、表だった政治行為はしていないが、政治意識が強かったと言われている。³ “Benito Cereno” に投影された彼の考え方は、Hawthorne のそれとは違う。少なくとも、Melville は、San Dominick 号上での悪夢の後にも奴隷制が存続したことに表れているように、この醜惡な制度が「消えてなくなる」などとは考えられなかったに違いない。

“Benito Cereno” は、一連の事件を描写する物語叙述、事件の被害者である Benito Cereno の宣誓供述書、そして後日談という、3 部構成でできている。物語叙述は、全知の語り手が語る体裁になってはいるが、その視点はしばしば Delano のそれと重なっており、筆者が注目するのは、その Captain Delano という一個人的視点と Benito Cereno の供述書という法的視点からの語りである。本論では、これらの視点からなされる語りが、いかに信頼を欠いたものであるかを考察し、語ることで形成される社会通念の虚構性を見ていく。

I

航海中に、Captain Delano は、奴隷運搬船 San Dominick に遭遇する。彼はこれを難破船と思い、親切心から乗船し、何らかの援助をしようとする。ここから全てが始まるわけだ。乗船してすぐ、彼は群集によって、様々な情報を与えられる。即ち、船中に流行り病が蔓延した上に、難破しかけ、食料も水も底をついた、ということ云々である。この時の Delano を語り手はこう描写する。“While Captain Delano was thus made the mark of all eager tongues, his one eager glance took in all faces, with every other object about him” (71).⁴ つまり、Delano のなすべきことは、San Dominick 全体というコンテクストを読み取る作業である。実際のところ、この船では奴隷たちの暴動によって主従逆転がおこっている。突然の Delano の出現のため、奴隷たちはこの事実を隠蔽しようと自分たちに与えられた役割を演じる。批評家たちにアメリカ人の代表と見なされている Delano は、⁵ “a person of a

singularly undistrustful good-nature, not liable” で、“malign evil in man” (67) など、思いつきもしない無垢な人物として登場し、奴隷たちの演技にまんまとひっかかる。ところが、博愛主義者のような顔をした彼が社会的偏見にとらわれていることは、徐々に判明してくる。

まず、我々は、船上の黒人奴隷たちを動物にたとえる Delano の言葉をしばしば目撃する。子どもに寄り添って寝ている黒人女性は、“leopardesses” や “doves” (105) に、挑みかかってくる黒人男性は “crows” (144) や “wolf” (148) になぞらえられる。Delano 自身の言葉は、時折、あたかも彼が黒人奴隷に対して思いやりある言葉を発しているかのような錯覚を読者に起こさせる。しかし、それはあくまでも自分、つまり白人を黒人よりも優位な立場においてのものである。語り手は、“In fact, like most men of a good, blithe heart, Captain Delano took to negroes, not philanthropically, but genially, *just as other men to Newfoundland dogs*” (121, emphasis mine) と、実のところを暴露する。紳士のごとき顔をしたこの男は、決して黒人を自分と同等、否、自分と同じ人間とさえ見ていないのである。

また、我々は、Delano が主従関係を回復、強化しようとやっきとなっていることに気づかなくてはならない。San Dominick 号がおかしな状態にあるということには、Delano も感付いている。ところが、彼は、このことを船長である Benito Cereno が威信を失い、hierarchy が崩壊しているからだとする。彼にしてみれば、“What the San Dominick wanted” は “stern superior officers” (78) であって、威信を欠いた船長は必要ない、さらには、自分が San Dominick 号の指揮権を握ろうというのである。“Evidently, for the present, the man [Benito Cereno] was not fit to be entrusted with the ship. On some benevolent plea withdrawing the command from him, Captain Delano would yet have to send her to Conception” (100).⁶ Delano にとっての「秩序」とは、同じ「人間」という種の間に階級を設け、それを保持することによって、成立するものである。彼は Benito Cereno の船の不穏な状態を、その真の事情も知らず、“anarchy” とみなし、強力な支配者の必要を説く。これは、階級を社会に不可欠なものとする者たちのレトリックである。表面だけを見て、その深層に目を向けようとはしない。Delano の “hierarchy”

に固執する姿勢は、食料配給の際にも見られる。彼は、誇りさえもって、自分のことを“republican impartiality” (115) を好む人間というが、これはうわべだけと言わざるをえない。実際、彼は Benito Cereno にだけ、白パン、砂糖、リンゴ酒を提供しようとする。このことは、Delano が階級というものに固執していることを暴露する。このような彼の行為に“partiality”があると言わずして何としよう。

さらに、Delano の思考は人種的イデオロギーの枠内でなされていることは、次の場面においても明らかである。

“Tell me, Don Benito,” he [Delano] added, with a smile—“I should like to have your man here, myself—what will you take for him? Would fifty doubloons be any object?”

“Master wouldn’t part with Babo for a thousand doubloons,” murmured the black. . . (101)

Delano は、Benito Cereno に追従する Babo を、自分が高く評価していることを表現しようとするのだが、その仕方が問題なのである。彼は人間に値をつけることで、その人物の評価をする。しかも笑顔さえ浮かべてだ。つまり、人間に値をつけることに対して、そして人身売買に対して何のためらいも、疑いさえもたないのだ。それは奴隷制社会で生きてきた彼にとって、耳慣れた言説であり、彼もまた、その社会の一員として、何ら抵抗を感じることなく、同じ言説を繰り返しているにすぎない。このことは、奴隷たちの反乱がわかってから、彼らと戦う際に Delano が自分の船員たちに呼びかける言葉にも反映している。“[T]o kill or maim the negroes was not the object. To take them, with the ship, was the object” (146). 自分たちの儲けになるから奴隷ごと船をぶんどれ、というこの言葉も、奴隷を人間でなく、売買することで利益を得る「商品」として見ている者の言葉の例としてあげられる。このような言葉を発するの何のためらいもないこと、また受信する側もまたその言葉をためらいなく受け入れること、これこそ作者が疑問視していたこと、不信を抱いていたことであろう。つまり、当時のアメリカ白人男性を

代表する Delano の言説は “Truth” ではなく、ある一つの社会だけで通用する “a truth” にすぎない。彼の語る言葉、彼の視点から語られる語りをそのまま信頼することはできない。

以上のように、人種のイデオロギーにがんがらめになっている Delano であるが、そのイデオロギーに挑戦する数々の出来事が、San Dominick 号で繰り広げられる。スペイン人のボーイが奴隷にナイフで刺されたり、2 人の奴隷がスペイン人水夫を踏みつけたりと、乗組員たちの行動は (Delano の基準で) 「不自然」であり、スペイン国旗が髭剃りの際に使われたり、従者としての必要以上に密着する Babo をつれた Benito Cereno は、何か隠し事があるのか、Delano の質問にまともに答えないなど、Delano にとって不可解なことは多々ある。これらの意味内容の不可解な記号に対して、Delano が出した意味付けとは、「黒人と白人の共謀」というものであった。白人が常に黒人より上位に位置づけられていることを当然のこととして擦り込まれている Delano にしてみれば、このような意味付けをすることは大冒険である。そして、案の定、彼はすぐにこの危険な意味付けを自分で打ち消してしまうのである。

[I] f the whites had dark secrets concerning Don Benito, could then Don Benito be any way in complicity with the blacks ? But they were too stupid. Besides, who ever heard of a white so far a renegade as to apostatise from his very species almost, by leaguin g in against it with negroes ? These difficulties recalled former one. (108-109)

枠の外へと一步前進しかけた足がまた引き戻された、といったところであろうか。Delano はやはり固定観念から逃れることができない。「常識」と言われるものはそれほど強固なのである。

San Dominick 号では、主従が逆転しており、それを示唆する情報があちこちに転がっている。にもかかわらず、Delano はそれらの情報を持前の枠の中で処理し、濾過してしまう。意識的にせよ、無意識的にせよ（無意識であればなおのこと質が悪い）、既存の社会秩序、社会通念に傷をつけず、それを基に全ての事柄を認識、意味付けする。甲板で、縄の結び目をいじっている

老人は、“Undo it, cut it, quick.” (109) という暗示めいたことを、眼前の事柄にうまく意味付けできず困惑している Delano に言う。この言葉は、船上で密かに行われていることに気付く、と示唆しているのみならず、Delano ががんにがらめになってるイデオロギーの束縛を解け、という意味にもとれる。しかし、Delano はどちらの意味も理解できない。

Delano は Benito Cereno に叱られる Babo(これも芝居)に同情して、“Ah, this slavery breeds ugly passions in man. Poor fellow!” (127) などと、奴隷制批判のようなことも口にし、博愛主義者のような態度をちらつかせるが、上述のことから、それが突き破られるべき仮面にすぎないことは明らかである。自分を新世界からやってきた正義の味方、真の善人といった顔をした Delano は、自分の言動を正当として疑わず、自分になんかの自信をもつ人物であるが、その実、旧世界の人種的偏見を基盤にした物事のとらえ方を継承しており、自分でも気がつかないうちに、新たな人種差別の言説を生み出しているのである。その彼が、San Dominick 号で主従逆転が起こっているなどとは思いつくはずもない。⁷ San Dominick という船をテキストと見立てれば、Delano は読み手となるわけだが、制約のある彼の読解力では、このテキストは「不自然」で、解釈不可能である。

II

“Impartiality” を誇る Delano であるが、その仮面の下に隠されているのは、19世紀半ばの白人男性の、上述のような人種的偏見だけではない。性に関する偏見もまたそうだ。双方とも社会における“power”のかたよりによって生じるものと言えるが、この“power”の反転こそ、San Dominick 号で起っていることなのだ。

甲板で、Delano は肌も露な姿で寝ている母子に注意を引かれる。目を覚まし、あふれんばかりの愛情で我が子に接する母親を見て、Delano は大満足する。

There's naked nature, now; pure tenderness and love, thought

Captain Delano, well pleased.

This incident prompted him to remark the other negresses more particularly than before. He was gratified with their manners: like most uncivilized women, they seemed at once tender of heart and tough of constitution; equally ready to die for their infants or fight for them. Unsophisticated as leopardesses ; loving as doves. (105)

この場面に出くわす前は、黒人女性が彼に語りかけるという光景はあったものの、彼の方が積極的に彼女たちを視野に入れ、語りかけるということはないのに、母の姿に打たれた Delano は、以降、黒人女性にも目を向けるようになる。つまり、彼が女性に求めるもの、女性に見いだして安心するものは、「母性」であり、女性は、ましてや黒人女性は、船全体という一つの社会を構成する重要要素とはなりえない。不可解な船を読み解こうとやっきになる Delano であるが、そのヒントを彼女たちから得ようとはしていない。なぜなら彼女たちが社会をどうこうするとはとても思えないからだ。Allan Moore Emery は、“Apparently Melville found the idea of female ‘generosity’ as dubious as the notion of black docility.”⁸と指摘する。女性性を付加することは、その人間を“powerless”にすることに通じる。Delano の女性に対する見方は、黒人女性が彼の規範で言うところの「社会秩序」を崩壊する反乱の一端を担っているとの認識から、彼をはるか彼方に遠ざけてしまう。ところが、実際は、彼女たちは男性以上の憎しみをもって、「社会秩序」なるものを打ち壊そうと必死なのである。人種的差別だけでなく、性的差別をもうけてきた彼女たちの憎しみは相当なものである。

the negresses, of age, were knowing to the revolt, and testified themselves satisfied as the death of their master, Don Alexandro; that, had the negroes not restrained them, they would have tortured to death, instead of simply killing, the Spaniards slain by command of the negro Babo; that the negresses used their utmost influence to have the deponent made away with . . . (163)

女性だからといって、戦うのは子のためばかりではない。一人の人間として、自分のためにだって、戦うのだ。せっかく黒人女性に目を向けるようになった Delano であっても、彼女たちの人間としての真の姿を見通すことはできない。黒人女性を偏った見方で見る限り、世間でもお決まりとなっている彼女たちの認識からは、一連の不可解な事柄を解明するための何らかのヒントを得ることはできない。

Delano が gender の観念にとらわれていることを示す例として、次に Benito Cereno と Babo の関係に目を向けてみよう。我々は、Delano の視点からの Benito Cereno と Babo の描写に、Sandra A. Zagarell の言葉を借りれば “a homoerotic coloring”⁹があるのに気づく。例えば、Babo が Benito Cereno の髭を剃るときに主人を傷つけてしまうという場面で、大騒ぎした後、二人がまた「仲睦まじく」くっついているのを見て、Delano は “a sort of love-quarrel” (127)だったのかと独言を言う。しかし、それ以上の言葉はない。以前から、彼ら二人の寄り添う姿はまるで恋人同士といった感さえるのだが、黒人を白人と同等、同種と見ていない Delano にとって、さらには gender の役割がはっきり分かれた時代人の彼にとって、彼らが恋愛関係にあらうとは決して想像だにできない。実際そうではないのだが、そのようなことがありえないというわけではない。否、そう考えるくらいの猜疑心をもって、固定観念をふりはらって、船上の事象を見るべきであった。しかし、Delano は決してはめられた枠を出ない。「危険」な考えはすぐに打ち消されるか、深入りしないうちに放棄される。そうすることで、彼は彼の生きる社会の危険分子になることなく、安住できるのである。

San Dominick 号で起こっていることは、power の反転であるが、それは gender の不安定化と密接に関わっている。南北戦争前のアメリカでは、まだまだ女性の社会的地位は低く、女性たちはか弱く、控え目であることを社会から要求された。一方、肉体的、社会的に、“powerless” な男性は、生物学的には男性でありながら、「女性」視された。このことは、“Benito Cereno” の中にも表われている。社会的に “powerless” な黒人は、Delano によれば、生来、家の中の仕事をするのに適性をもつとされる。彼は言う。“There is something in the negro which, in a peculiar way, fits him for avocations

about one's person. Most negroes are natural valets and hair-dressers” (120). Zagarell は、19世紀アメリカ社会において、“feminization” と “domestication” が同じようなものとして認識されていることを指摘する。¹⁰ 黒人は “domestication” されることで「女性」視され、社会的に力をもつ白人男性に従えられている。また、黒人奴隷は、“the unaspiring contentment of a limited mind” (120) をもつと一方的に決めつけられ、女性同様、黒人奴隷が現状に対して不満を爆発させるのを暗に禁じる社会の言説がここに垣間見られる。しかし、これらのことはあくまで Delano の規範の中での意味付けであり、既存の社会秩序が崩壊している San Dominick 号では、Delano の生きる白人家父長制社会での hierarchy は通用しない。ここでは、黒人により白人が「女性化」されている。船上で、黒人によって Benito Cereno は骨抜きにされ、自由に語ることを許されない。¹¹ 彼はいつも弱々しく、Babo に頼りきりである。その姿は、まさに女性に求められていたもののそのものである。¹² 黒人たちは、女性を “powerless” とする白人社会の慣習を皮肉にも利用しているのだ。

San Dominick 号では、“race” も “gender” も不安定化し、既存の社会通念では理解不可能の状態になっている。Delano の固定観念を揺るがすような事象が彼の眼前に転がっているのだ。このチャンスにもかかわらず、Delano の認識力ではそれらの真の意味を解明できない。確かに、真の認識は、それまで彼が絶対的信頼をおいて依存してきた社会秩序を崩壊させることになるだろう。それは、後に Benito Cereno が死を迎えることに表われているように、その人間の基盤を根底から崩すことにもなりかねない危険なことではある。Melville はそれを承知の上で、そうすることの必要性を感じていたのではないか。我々は、Delano の視点からなされる語りを信じてはいけな。我々の読みを誤読に導こうとする語りの網をかいくぐるのだ。そして、“gender” にしても、“race” にしても、個人に対して一方的に社会によって付加された「役割」にすぎず、それがその人間の本質でない以上、与えられた意味は交換可能であることを認識しなくてはならない。Zagarell の言うように、全ては文化的慣習にすぎず、San Dominick 号上で露呈する、不安定な “gender” の意味も、“race” の意味も、不等な力関係を基盤にした不安定な社会秩序か

ら生じたものにすぎないのだ。¹³

III

正義の人 Delano の視点による語りの不確かさをこれまで見てきたが、この章では、本小説の後半に登場する法文書の語りの不確かさを考察する。前半の曖昧模糊とした事件の決着を一気につけようとするかのように、Benito Cereno による宣誓供述書が後半の中心的内容として打ち出される。しかし、世間でおおっぴらに公明正大とお墨付きを得た「法」ではあるが、それさえも完全に信用できるものではない。一体それは誰がつくった、誰のための「法」なのか。

内容に入る前に、本小説の社会的背景に目を向けたい。Melville の実父の友人であり、妻の父である Lamuel Shaw は、Massachusetts 最高裁判所の判事であった。Shaw は、“antislavery judge” との評判高く、黒人奴隷の側にたった判決をくだしていた。¹⁴ ところが、その評判にもかかわらず、彼は 1850 年の “the Fugitive Slave Act” を支持した。Shaw は奴隷性を嫌ってはいたが、法によって容認されなければならないと考えていた。法を司る者として、そして新世界アメリカ建設という偉大な目的の前に国民を一致団結させるため、奴隷制は必要悪と考えたのだ。Brook Thomas は以下のように説明する。

[Judge Shaw] felt the most important consideration was the “moral” necessity of holding the Union together.

... Preserving the Union was a moral imperative because the United States was not merely one government among many but the hope of mankind : It, above all others, guaranteed the absolute and entire supremacy of law. If abolitionists claimed that the country was not worth saving because the passage of laws like the Fugitive Slave Act violated its sacred mission, Shaw felt that unless the Union were saved its sacred mission could never be fulfilled.¹⁵

アメリカ人には、建国時以来、特別な使命感をもって新天地を切り開こうとしてきた歴史がある。自分たちのすることの神聖さを強調する姿は、Manifest Destiny などに表われている。しかし、そのレトリックを使って、冷静に見れば許されるはずのないことも正当化してしまうということもあった。¹⁶ そもそも、奴隷制を持ち込むことは、旧世界の旧習を全て捨て、希望に満ちた新世界をつくろうという目的に反する。だが、「偉大な目的」というレトリックの前にはその矛盾も解消してしまう。そしてレトリックが新たなレトリックをつくるという循環運動が繰り返され、それがいつのまにか真実となっていく。しかも、その中に法までが組み込まれてしまえば、公的に正当化されたことになる。虚構の語りもいったん社会を「真」として通過すれば、もはや虚構でなくなるのだ。Melville はここに疑問と不信を抱いたと思われる。¹⁷ 実質的に何か行動を起こしたというわけではないが、強い政治意識をもった彼は、法さえも時には全面的には信頼できない語りとなるという見解を、自分の作品の中に反映させている。¹⁸

時代背景を踏まえた上で、作品内容に戻ろう。“Benito Cereno”における、Benito Cereno の宣誓供述書は、それまでの事件を一気に解決するかのような顔をして我々の前に出される。しかし、法で認可されたこの供述書が不確かなものであることは、はじめから示唆される。

The following extracts, translated from one of the official Spanish documents. ...

... Some disclosures therein were, at the time, held dubious for both learned and natural reasons. The tribunal inclined to the opinion that the deponent, not undisturbed in his mind by recent events, raved of some things which could never have happened. But subsequent depositions of their captain in several of the strangest particulars, gave credence to the rest. (149)

即ち、我々が供述書を完全に信頼できない理由には、以下のようなことがあげられる。①供述人 Benito Cereno は、事件のため精神錯乱を起こしてお

り、そのような状態での供述には信憑性が欠ける。② Benito Cereno の証言を立証するのは彼の水夫たちで、第三者の立場で事件を証言する者がいない。何より、Babo をはじめとして、被告人である黒人側の証言はない。③本供述書は抜粋で、公式のスペイン文書の一部の翻訳である。このようなことから、我々は事件の全貌を本当に明らかにされたとは言い難い。確かに宣誓は完全だ。“Don Benito Cereno... received the oath [of the monk Infelez], which he took by God, our Lord, and a sign of the Cross ; under which he promised to tell the truth” (150). しかし、この儀式にごまかされてはいけない。法的に、さらには宗教的に、容認された供述書ではあるが、これもまた、不安定な社会秩序の産物にすぎない。“So that the tribunal, in its final decision, rested its capital sentences upon statements which, had they lacked confirmation, it would have deemed it but duty to reject” (149). いくら体裁は完璧でも、この法律文書は白人の醜悪な現実を意図的に省略した、信頼できないものである。

供述書の中では、Benito Cereno の幼なじみであり、船主である Aranda が、手足を切断された後で殺されたときの様子や、奴隷たちが「嬉々として」残虐きわまりない行為を行なう様子が書き連ねられ、奴隷たちの情け容赦のない残忍ぶりを強調する言葉がそこかしこに見られる。しかし、語りの虚構、隠蔽が読み取られるべき本小説においては、いくら法的文書であっても、その語りをそのまま鵜呑みにはできない。例えば、語りの中で、“the humble slave” (160) という言葉が使われ、黒人たちはまだ白人に従属するものとみなされていることがうかがえるし、男性奴隷の年齢、名、経歴は確認されているのに、女性奴隷は名も年齢も確認されず、こどもとひとくくりになされ、軽んじられている。これらの言葉は、語り手が人種的、性的偏見をもつことを露呈する。そのような言葉を平気で使う語り手によって、黒人たちが残虐な野蛮人であることが、一方的に繰り返し強調される。これらの言葉は誰にも非難されることなく、社会に受け入れられ、法によって承認されるのだ。黒人を人間と見ないイデオロギーを受容している白人からすれば、これらは聞き慣れた言説であり、このような言葉をまた新たに受容することで、さらにイデオロギーは強化される。Benito Cereno の供述書は、表面的には事件

に一応の決着をつけるかもしれない。だが、事件の本質に迫るものではない。その本質は意図的に省略、隠蔽される。このように、社会では、法によって一方的に一件落着とされることで、問題がさも解決したかのように考えられることのいかに多いことか。法によって承認された Benito Cereno の宣誓供述書は、不可解な一連の事件の謎解きをする一方、根本的な奴隷の反乱の意味を、公的に閉じ込めてしまうのだ。¹⁹

供述書で語られる奴隷たちの行動は容赦ない残忍なものである。しかし、残虐行為の極みとして語られること、即ち、Aranda を殺害し、その頭蓋骨を船首へととりつけるという Babo の行為は、事件後、彼が白人たちの手によってされることと全く同じである。Babo は、Aranda 同様殺され、さらし首にされるのだ。“[D]ragged to the gibbet at the tail of a mule, the black met his voiceless end. . . . [F]or many days the head, that hive of subtlety, fixed on a pole in the Piazza” (170). まさに作家が意図したとしか思えない類似である。黒人を「残虐な野蛮人」とする白人に、その言葉をそのままそっくり返さなくてはならない。両者の違いは、後者が受けた行為は、「刑罰」として法で正当化されている点である。しかし、我々はそこに煮え切らぬものを感じざるを得ない。なぜなら、Benito Cereno の供述を真実とし、それをもとに判決を下す法とは、既述のように、もはや信頼できないものだからだ。

事件後、奴隷側の主導者 Babo は何も語らない。まるで語っても無駄だと言わんばかりである。長い奴隷制度の歴史において、奴隷は人間以下と見なされ、一方的に主人である白人の言葉をあびせられるばかりで、「語る」という権利、自由をさえも奪われていた。事件後、Babo は語るように強制される。しかし今度は語ることを自ら拒否する。語ったところで、白人の語りに対抗できないとわかっているからであり、語らざることで個人の語る権利を主張しているからである。発話とは強制されるものではない。人間は自由に語る生きものだ。しかし、“man-made law” が権威をもつ社会では、社会の構成員とみなされてはいない奴隷たちの語りが介入する余地はない。²⁰ 奴隷制そのものが“man-made law”によって成立しているのだから、「法」と言われるものが公明正大とみなされる限り、Babo が語ったところで一蹴されるだけで

あっただろう。

このような偏った立場にある法によって承認された Benito Cereno の供述書は、事件の根本的解決に役立ちはしない。宣誓供述書の直後に、次のような語り手のコメントがある。“If the Deposition have served as the key to fit into the lock of the complications which precede it, then, as a vault whose door has been flung back, the *San Dominick's* hull lies open to-day” (166) . “If” で書かれたこの文は、*San Dominick* 号で起こったことが法的文書によってさえも解決していないことを示唆する。引用した文中の “key” は Benito Cereno が首にさげていた鍵と重なる。Benito Cereno がもっていた鍵は奴隷の鎖の鍵であるが、この鎖は自分で外せるように細工されており、鍵は何の役にもたたない。それと同様に、Benito Cereno の供述書も、事件解明の鍵として役に立つことはない。法的文書は、奴隷制を是とする社会体制の非倫理性を暴くでもなく、それによって虐げられた者たちの意志を明らかにするでもなく、肝心なことは全て隠蔽したまま、*San Dominick* 号で起きたことに「(本質的な) 終わり」でない「(一時的、表面的な) 終わり」を一方的に押しつける。こうして、Melville が Shaw を通して実感した、法さえも白人に都合のいい社会体制維持に加担するという実態は、本小説中で、法的文体の語りにおける信頼性の欠如という形で表現されるのだ。

結

“Benito Cereno” において、アメリカの白人男性を体現する Delano の個人的視点からの語りと法的視点からの語りが、いかに信頼できないものであるかを見てきた。それはまさに白人たちが黒人に対して使ってきた言葉であり、個人と法の両方が一緒になって、一部の者の利益のため巧妙に利用してきた言葉である。「語る」ことで真実は都合のいいように歪曲、隠蔽され、今度はその言葉が「真実」としてまかり通るようになる。「真実」や、「常識」や、「自然」といった仮面を被った「語り」の影響力は大きいが、その実体はぞっとするほど虚ろなものだ。現象とその背後の不可視の意志を一つのテーマとする Melville は、南北戦争直前にそのことを実感していた。

Sacvan Bercovitch は、アメリカン・ルネッサンス期の作家について、次のように述べる。

The works of our classic writers show more clearly than any others I know how American radicalism could be turned into a force against any form of change that would decisively alter the norms, ideals, and structures of American culture. If. . . the nineteenth-century revivals were the Frankenstein's monster of Puritan rhetoric, then the American Renaissance was its aesthetic masterpiece, the creative *summum et ultimum* of a social myth designed to meet the exigencies of modern society in the New World.²¹

しかし、Melville は本論で見てきたように、決して “a social myth” に妥協してはいない。むしろ “the Frankenstein's monster of Puritan rhetoric” に対抗し、その向こうに隠されたことを暴露しようとしたと言える。

事件後、Delano と Benito Cereno が話をする場面がある。事件の実体を把握できないままの Delano は衰弱した Benito Cereno に “〔W〕hat has cast such a shadow upon you ?” (169) と尋ねる。これに対して、Benito Cereno は “The negro” (169) とのみ答える。主従逆転の経験をした彼は、黒人が自分と同じ人間であり、白人優位の体制は虚構にすぎないことを知った。しかし、これを語ると、自分が所属する社会体制を根幹から崩壊させてしまう。“Benito Cereno” では、「語る」ことは「騙る」ことだ。そして、Melville の作品中（例えば *Pierre*, “Bartleby, the Scrivener”）では、語ることができないものには死しかない。Benito Cereno も、社会の本質を知った以上もとに戻れず、かといって急進的な言動をとることもできず、死をむかえる。一方、Delano は語る。語って、偽りの、脆い社会体制の中で生き続けるのだ。

註

1. Nathaniel Hawthorne, “Life of Franklin Pierce,” vol. 12 of *The Works of*

- Nathaniel Hawthorne* (Boston : Houghton, Mifflin and Company, 1883) 415, 416.
- 2 . Hawthorne 417.
 - 3 . Melville の政治性については Stanton Garner, *The Civil War World of Herman Melville* (Lawrence : University of Kansas, 1993) 参照。
 - 4 . Herman Melville, "Benito Cereno," *The Standard Edition of the Works of Herman Melville*, vol. 16 (New York : Russel and Russell, 1963) 66-170.引用は全てこの版により、頁数は括弧に入れ本文中に記載する。
 - 5 . 例えば、H. Bruce Franklin は Delano のことを次のように表現する。"〔Delano〕 serves as a representative American of his own time, of Melville's time, and of the time on the eve of our own century when the United States would achieve its "manifest destiny" by seizing what was left of the collapsing Spanish empire and thus itself becoming a global empire."
- H. Bruce Franklin, "Past, Present, and Future Seemed One," *Critical Essays on Herman Melville's Benito Cereno*, ed. Robert E. Burkholder (New York : G. K. Hall & Co. , 1992) 235.
- 6 . Allan Moore Emery は、Delano の行為をアメリカの領土拡張主義と重ね合わせた解釈をしている。" 'Benito Cereno' and Manifest Destiny," *Nineteenth-Century Fiction* 39 (1984) 46-68.
 - 7 . Adler は、"He [Delano] is too much a white man of his time to learn much of value from the *San Dominick* experience."と指摘する。Joyce Sparer Adler, *War in Melville's Imagination* (New York : New York University Press ,1981) 108.
 - 8 . Allan Moore Emery, "The Topicality of Depravity in 'Benito Cereno' ," *American Literature* 55 (1983) 327.
 - 9 . Sandra A. Zagarell, "Reenvisioning America : Melville's 'Benito Cereno' ," *Critical Essays on Herman Melville's Benito Cereno*, 134.
 - 10 . Zagarell 134.
 - 11 . 女性が執筆活動すること、ましてや人前で自分の意見を話すことは、「女らしくない」として非難された。しかし、女性作家の文学界進出は1850年代以降めざましい。Susan K. Harris, *19th-century American Women's Novels : Interpretive Strategies* (Cambridge : Cambridge University Press, 1992) 3 には、女性の"word rights"獲得について書かれている。
 - 12 . Zagarell は弱々しい Cereno の姿を、"a parody of the fragile, genteel lady" とみなす。Zagarell 134.
 - 13 . Zagarell も人種的、性的偏見の両方を指摘し、それが人為的につくられたものでしかな

いとする。

“The novella demonstrates that the hierarchy and the characteristics of both race and gender, thought to be natural by antebellum Americas, are merely conventions ; it also implies that all culture is a human creation, subject to change and frequently unstable.” (Zagarell 134) .

14. Brook Thomas, *Cross Examination of Law and Literature : Cooper, Hawthorne, Stowe, and Melville* (Cambridge : Cambridge University Press, 1990) 95.

15. Thomas 97.

16. Sacvan Bercovitch は “New Israel” や “American Jerusalem”などを例にあげ、アメリカにおける “a rhetoric of mission” を考察する。Sacvan Bercovitch, *The Rites of Assent : Transformation in the Symbolic Construction of America* (New York : Routledge, 1993) 29-67. また、Zagarell は、このような選民意識が Delano に反映しているとする。

“[Delano] thinks himself possessed of *superior energy and decisiveness* that emanate from his *privileged nationality*. Delano’s smugness is characteristic of the prevailing American political and cultural climate of the 1850s, for Melville was writing at a time when many Americans insisted on *their country’s superiority* and saw its destiny as *historically unique*. In 1854-55, when he composed “Benito Cereno,” such feelings were taking political expression in the doctrine of Manifest Destiny and the Young America movement. . . .” (Zagarell 127, emphasis mine).

17. Karcher は、特別な使命をもった国とみなされるアメリカに対する Melville の考えを次のように述べる。

“Melville did not long cherish the hope that America would become a Paradise. . . . [H]e expected apocalyptic doom, rather than millennial jubilee, for America. . . . [T]o Melville, slavery came to epitomize the vanity of America’s millennial aspirations ; but to most abolitionists, slavery was the primary obstacle in the way of fulfilling these aspirations. ”

Carolyn L. Karcher, *Sadow over the Promised Land : Slavery, Race, and Violence in Melville’s America* (Baton Rouge : Louisiana State University Press, 1980) 17.

18. Garner 1-36.

また、Ralph Waldo Emerson は、“What a moment was lost when judge[Lemuel] Shaw declined to affirm the unconstitutionality of the Fugitive Slave Law !”と言

い、法における信頼性の欠如を次のように表現する。“You relied on the Supreme Court. The law was right, excellent law for the lambs. But what if unhappily the judges were chosen from the wolves, and give to all to the law a wolfish interpretation?” Ralph Waldo Emerson, *The journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*, vol.16, ed. Ronald A. Bosco and Glen M. Johnson (Cambridge; The Belknap Press of Harvard UP, 1982), 361 and “Fugitive Slave Law,” *The Complete Essays and Other Writings of Ralph Waldo Emerson*, ed. Brooks Atkinson (New York; The Modern Library, 1950), 570.

19. 法的文体についての同様な見解は、Brook Thomas の他、例えば Eric J. Sandquist に見られる。

“[W] hile [the deposition] explains the mystery, unlocks it, it also publically and legally locks up the significance of the revolt in chains and sentences that are incapable of satire and irony and as real as those that reenslave the revel slaves.”

Eric J. Sandquist, “Suspense and Tautology in ‘Benito Cereno’ ,” *Herman Melville’s Billy Budd, “Benito Cereno,” “Bartleby, the Scrivener,” and other Tales*, ed. Harold Bloom (New York : Chelsea House Publishers, 1987) 104.

20. Brook Thomas は、Melville が奴隷たちの反乱の設定を “natural law” に支配された海にしたことを次のように重視する。

“[T] he ‘literary’ idea that the sea was ruled by natural, not man-made, law had important legal consequences. . . . From the start of ‘Benito Cereno’ Melville emphasizes that the action takes place in a territory where the customary controls of man-made law are absent.” (Thomas 104-105).

21. Bercovitch 59. 牧野有道氏はこの主張を「逆説的ながら価値を持つ」とみなし、議論している。牧野有道、『世界を覆う白い幻影—メルビールとアメリカ・アイディオロジ—』（南雲堂；1996）、37-39。